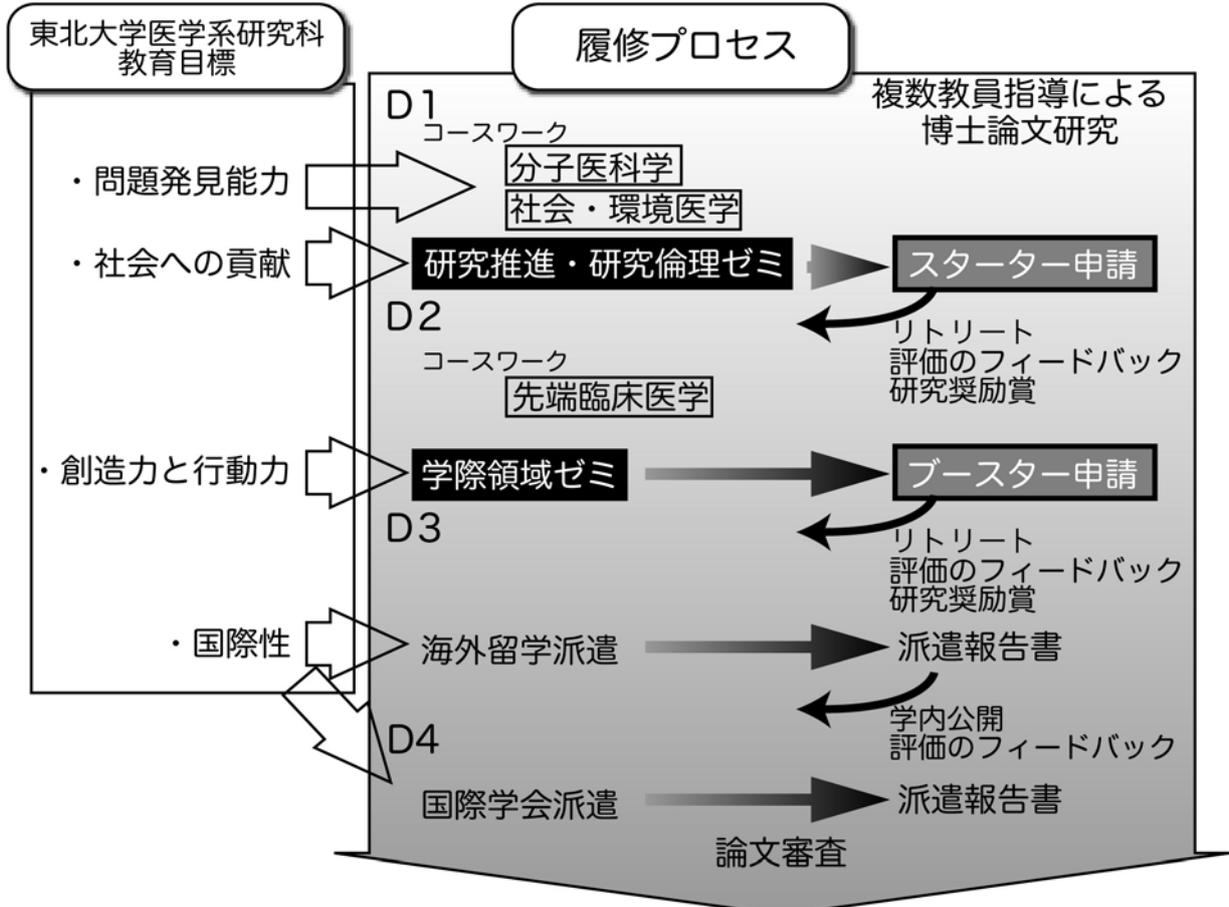


教育プログラムの概要及び採択理由

機 関 名	東北大学	申請分野(系)	医療系
教育プログラムの名称	多層のかつ双方向性の大学院医学教育実質化 (指導的フィジシャンサイエンティスト養成ルネサンス計画)		
主たる研究科・専攻名	医学系研究科医科学専攻		
(他の大学と共同申請する場合の大学名、研究科専攻名)			
取組実施担当者	(代表者) 山本 雅之		
<p>[教育プログラムの概要]</p> <p>I. 教育プログラムの位置付け</p> <p>東北大学医学系研究科の医科学専攻医学履修課程（以下「医科学専攻」と呼ぶ）は定員 144 名の超大型医学系専攻である。大学院重点化以来、東北大学の「研究第一主義」の理念のもとに集う大学院学生数は増加の一途を辿っており、とりわけ本研究科には約 500 名の臨床系大学院学生が在籍している。一方、大学法人化による大学病院経営強化や初期研修必修化の流れの中で、全国医学系研究科が直面する問題として、臨床系大学院指導層の希薄化と大学院学生の「研究指向の低下」が顕在化している。臨床研究を通じて医学と社会を発展させる人材（フィジシャンサイエンティスト）が、枯渇する危機に直面している。こうした事態に対し本研究科では、教育体制の強化（後述）や教職員総力をあげての研究指導を実施してきた。しかし、従来からの徒弟制的指導体制と座学型授業体系では学際性を増しつつある医学に対応できるフィジシャンサイエンティストを養成するには不十分であるとの認識が教員と学生の双方に強まっている。そこで、多様な才能をもった有為な医学系人材の系統的な養成を行う目的で、大学院教育のルネサンスに向けた提案を行うことを企画した。本申請プログラムは、「複数教員指導制」の実質化を徹底し、博士（医学）の学位を目指す研究活動の中で自立性・協調性の涵養を図り、また、知識と経験の両面から国際性と学際性を育み、国際的に通用する「指導的フィジシャンサイエンティスト」の育成を旨とするものである。</p> <p>II. これまでの教育の取り組みについて</p> <p>教員組織の整備：医学系研究科全職種を対象に教員任期制を導入し、教員の流動性を高めてきた。教授選考にあたっては公募制を積極的に利用し、優秀な指導的人材の確保に努めてきた。研究科長裁量経費などを活用して流動的教員 7 名を雇用するなど、若手教員の育成も図ってきた。</p> <p>ファカルティー・ディベロップメント (FD) の実施体制の整備：専任教授を配置した医学教育推進センターを設置し、そこを中心に大学病院とも連携しながら、活発な FD 活動を実施してきた。また、教員の採用・昇任の要件として FD 受講を義務づけ、教員に高い教育意識・能力を求めてきた。</p> <p>学生支援体制の整備：優秀な学生をティーチングアシスタント (TA) やリサーチアシスタント (RA) に登用し、経済支援を行ってきた。社会人入学制度、長期履修制度、インターネット受講制度 (ISTU) を実施し、様々な就学形態のニーズに対応してきた。卒後研修センターが中心となって、卒前・卒後学生のキャリアパス形成についての助言と支援活動を行ってきた。</p> <p>評価体制の整備：研究科自己点検評価委員会が中心となって全教員の研究成果、外部資金獲得状況、教育貢献などに、教員の活動状況を公開・評価する情報データベース (EAST) を確立した。大学院学位研究の成績評価は、4 名以上の教員参加による一次審査会（公開）と 3 名の教員による最終審査会により行われ、一次審査会の審査結果を学生にフィードバックするシステムを採ってきた。</p> <p>III. 本教育プログラムの実施内容</p> <p>本申請計画では、「複数教員指導制」を実質化し、1) 高度の専門性と学際性を育成する 3 つのコースワーク授業（分子医科学、社会・環境医学、先端臨床医学）、2) 国際性の涵養を図る国際化育成プログラム（海外インターンシップ）、3) 研究活動にリンクした実習課題を通して自主性を育成する研究企画・展開力育成プログラム（研究推進・研究倫理ゼミナールと学際領域ゼミナール）を新たに実施する。特色は、大学院学生全員に必修ゼミナール形式による研究テーマ提案と研究進捗状況の中間報告を課す多層的な研究指導を行う点である。大学院課程で新たに 2 度、成績評価とフィードバックの機会を設ける。そして成績優秀学生を顕彰し、当該大学院学生に発表の場の提供し、そのプロジェクトの支援強化を行う。このような取り組みを通して、大学院学生は質の高い研究の企画力・展開力の涵養と同時に、研究費獲得など実際の研究遂行スキル向上も期待される。高学年の学生は、ルネサンス TA として研究テーマ提案・進捗状況について評価者となる。実質的な複数教員指導制は、学生教育や教育プロセス管理に機能するだけでなく、教員にとっても研究指導力向上や異分野との協力体制構築など、キャリアディベロップメントにもなる（双方向性の教育）。海外インターンシップなどのフィールド授業を推進するとともに、大学院学生やアドバイザー教員への情報発信機関（「拠点広報室」）を設置して、ホームページやメーリングネットワークを利用した教育支援の充実も図る。</p>			

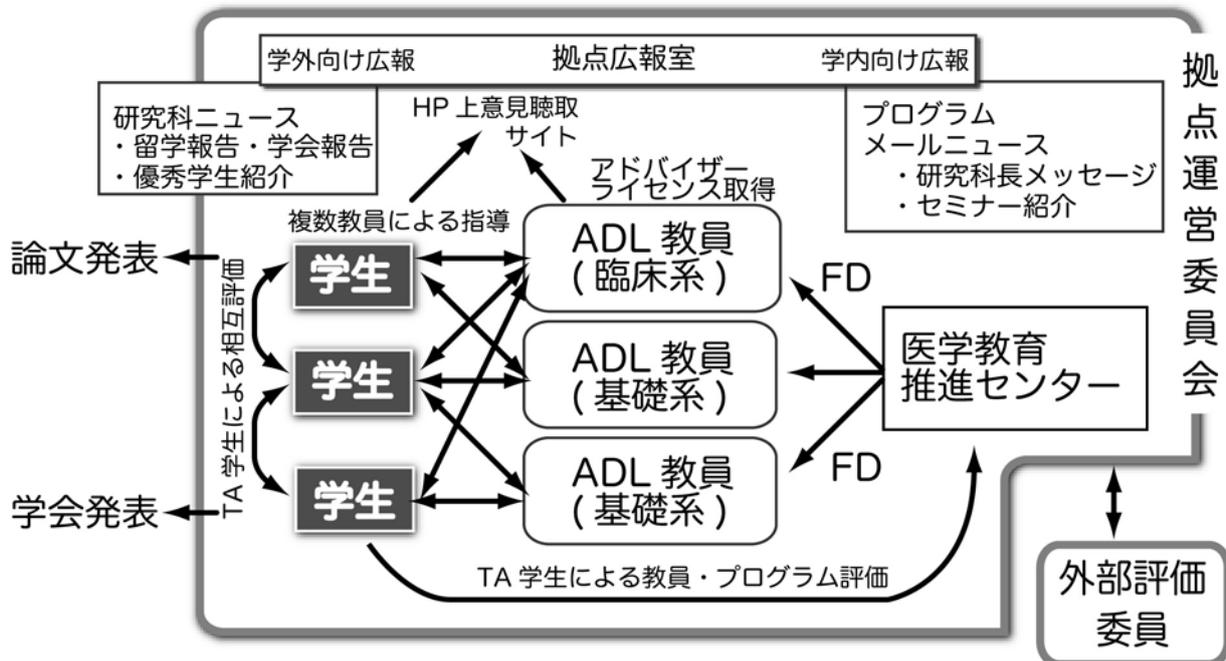
履修プロセスの概念図（履修指導及び研究指導のプロセスについて全体像と特徴がわかるよう図示してください。）

教育目標達成のための履修プロセス



フィジシャン サイエンティスト

多層性と双方向性



<採択理由>

大学院実質化の面については、臨床研究を通じて医学と社会を発展させる人材（フィジシャンサイエンティスト）の育成を目指し、1学年100人を超える大型大学院の博士課程教育において、ファカルティ・ディベロップメントを通じ、若手研究者に「アドバイザーライセンス（ADL）」を与え、大学院生指導に参加させるとともに多層的、双方向的に教育する体制を用意することによって、大学院教育の実質化に積極的に取り組むことは評価できる、さらに、教育することにより、自らも教育されるという研究者養成システムの創出は、高く評価される。

教育プログラムについては、これらの指導体制により、臨床系大学院指導層の希薄化と大学院生の「研究指向の低下」に対処するため、コースワーク授業の拡充、研究企画・展開力育成プログラムなど、工夫が見られるが、実施に向けて運営体制の工夫と実現性あるプログラムとすることが望まれる。